

## 何事も都合の良い方に解釈

一応、皆が自分の寝る場所につき、位置を確認して、後は船内、どこでも自由行動となったが、僕は、三時間ほど、二等客室の自分の場所で、ゴロ寝して、テレビ見たり、目を閉じて、八月八日に会う彼女と、どう対応したらよいかを考える。

皆が、晚めしを食べ出したが、心配だったので、「腹がすく迄、我慢」と、今度は、皆がない甲板に出て、日没の海の風にあたりながら、一時間程、風景を楽しむ。

船酔いの心配はないと確信して、やっと、めしにした。腹が減って、うまい。うまく食べれるし、食欲あるし、これは大丈夫だと、やっと確信し、自信を持った。

潮風にあたりつつ、今来た後方、淡路島、明石の方面に目を向け、心の中で、そっと、彼女の名を呼んだ。じっと、東の空を見た。

「あの空の下に彼女がいる。」

先程まで夕日が大変、赤々と燃えて、きれいだっただが、もうない。今は、真っ暗な夜。